共通教育について語り合う会「フクトーーク」
―教養教育科目 C 群「歴史と文化」を考える―

大学教育センター　津田　将行　　日暮　美紀

1. はじめに

現在、日本や世界を取り巻く課題として、国際化、SDGs、環境問題、情報通信技術の発展、少子高齢化、及び地域格差などがある。それらの課題は、時に大きく変化しながら、場合によっては複合的要素が交わりながら、これまでの常識が通用しない、不透明で、予測がつかない社会への変動に伴い進行している。学生には、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて、知識を活用して、付加価値を生み、イノベーションや新たな社会を創造していく人材となっていくことが求められており、国際的視点を持ち、個人や社会で多様性を尊重しつつ、他者と協働して課題解決を行うことができる力を身につけることが求められている。

そこで大学時代に社会人としての教養を深めて高い見識を持ち、豊かな人間性を培い、諸問題の課題を解決するスキルを身に付けるために、共通教育の役割は大きく、これには時代に合わせた充実した教育が望まれている。

本学では、学修の主体者である学生が参加して、魅力的な授業や学修支援の在り方等を一緒に考え企画する企画提案型の意見交換会「フクトーーク」が開催されている。この「フクトーーク」では、共通教育での学び方､学びたい科目やテーマ､学修支援のポイントをはじめ学修成果が期待できる様々な工夫やアイデアなどに関する語り合いを通じて、魅力的な授業内容･方法や新しい学びを創出しようとしており、そして共通教育の一層の充実が目指されている。ここ示す共通教育は、初年次教育科目、共通基礎科目、教養教育科目、及びキャリア教育科目が該当する。

2. 令和 5 年度におけるテーマ設定に関する経緯

本学では､学生の共通教育に対する現状把握と質の向上を目的として､共通教育科目の受講生が多い 1 年次を対象として、毎年、共通教育アンケートを実施しています。

過年度にあたる令和 4 年度共通教育アンケート(1)の中で、設問「共通教育科目で充実していると思われる科目群」に対する回答結果を図-2.1 に示す。この結果から共通教育科目の中で充実度の割合が一番高いのは｢英語｣の 21.6%、次いで上位から順に「ドイツ語・中国語・フランス語・韓国語など初修外国語」14.8%、｢初年次教育科目（教養ゼミ）｣14.3%、「日本語表現法｣9.6%であった。このことから、語学系科目、及び教養ゼミに対する充実度の割合が高いことがわかる。

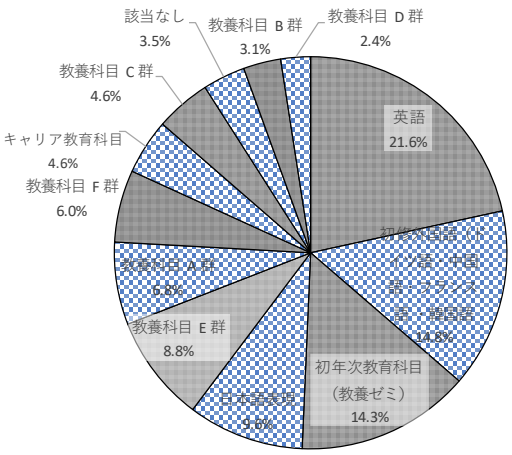

図-2.1　共通教育科目の充実度の割合

次に充実度が高いのは、教養教育科目の E 群「芸術と健康・スポーツ」が 8.8%であり、次いで A 群「自然と科学」が 6.8%、F 群「地域学」が 6.0%、キャリア教育科目が 4.6%、C 群「歴史と文化」が 4.6%、B 群「社会構造と生活」が 3.1%、そして充実度の割合が最も低かったのは D 群「思索と創

造」の 2.4%であった。このことから教養教育科目に対する充実度の割合が低く、早急なる改善が必要であることがわかる。

そこで、今回のフクトーークのテーマとしては、充実度の割合が低い教養教育科目群の D 群、B 群、C 群の 3 つの群の中から 1 つのテーマを選定することにした。しかし、D 群については、令和 3 年度のフクトーークのテーマとして実施しているため、今回のテーマから外した。したがって B 群と C 群の比較検討を行うため、表-2.1 に各群の授業科目を示す。

表-2.1　教養教育科目 B 群と C 群の授業科目

	B 群	C 群
授業科目名	市民生活と法	日本史(1)
	憲法	日本史(2)
	法学概論(1)	世界史(1)
	法学概論(2)	世界史(2)
	現代社会と経済	人文地理(1)
	社会学	人文地理(2)
		地誌
		文学との出会い
		アメリカ文化史
		イスラム文化
		エスニシティ論
		メディア文化論
		日本民族論
科目数	6	13

B 群は「社会構造と生活」をテーマとしており、法律、憲法、及び社会学など計 6 科目が設置されている。それに対して C 群は「歴史と文化」をテーマとし、日本史、世界史、人文地理、及び地誌など計 13 科目が設置されている。充実度の数値を比較した場合、B 群の方が低いため早期にテーマとして議論をする必要があるが、科目数を比較すると C 群の方が、科目数が多く、また近隣の大学の教養教育科目では「社会構造と生活」に関係する科目よりも「歴史と文化」に関係する科目が多い。そこで、他大学の授業科目を学生に提示し、本学と他大学を比較することで、学生にとって現状や問題点の抽出、及び改善点等がイメージしやすく、新規性のあるものを発想しやすい C 群「歴史と文化」をテーマとすることにした。「温故知新~人の生き様をタテヨコへと眺めて、次代を創る~」と題し、「歴史と文化」に対する学生の思いやそこで学びたい事柄、さらには学修内容の充実につながるような授業方法等についてグループ内で意見交換を行い、大学へ提案することにした。

3. フクトーークの実施方法

(1) 参加希望学生の募集、及び参加登録について

2023(令和 5)年 10 月 16 日から 11 月 1 日の期間に参加学生を募った。告知は以下の 3 種の方法を採った。1 つ目は学内にポスターを掲示した。2 つ目は本学の学生ポータルシステムである Zelkova による告知を行った。3 つ目は各学科の教員や共通教育科目担当の教員から授業などを通じて連絡した。

また参加登録は、Microsoft の Forms を使用した。参加希望学生には、学生番号と氏名を記入してもらった。

(2) 事前説明会の開催

2021(令和 3)年度から「フクトーーク」の事前説明会を実施している。目的は、①スモール･グループ･ディスカッション(以後、SGD とする)での対話の時間を十分にとるため、②学生に議論のテーマについて説明を行い、当日までの期間でテーマについて考えを深め整理するとともに、そのヒントとなる資料を提供するため、③当日の SGD の方法、進め方を理解するため、の 3 点である。今回の事前説明会は、2023(令和 5)年 11 月 8 日（水）の 12:30～12:50 に、7 号館 2 階のプロジェクトラウンジで実施した。

(3) フクトーーク当日、及びグループ分け

「フクトーーク」は、2023(令和 5)年 11 月 22 日(水)の 16:30～18:00 に、大学会館 3 階 CLAFT 教室

で実施した。当日の参加学生数は 8 名であった。そこで、1 グループを 4 名とし、2 グループに分かれた。

(4) 進め方

当日は図-3.1 に示すフレームワークへの書き込む方式で SDG を行い、その後、発表を行った。フレームワークでは STEP1 と STEP2 を使用した。STEP1 では一人ずつ「歴史と文化」に対しての現状分析、受講後のありたい理想の姿、現状の授業に対する改善点や要望等について意見出しや整理を行った。STEP2 では、新規科目の提案として授業名、その授業の概要、及びその授業を推奨する理由を 3 つ提案するものとした。

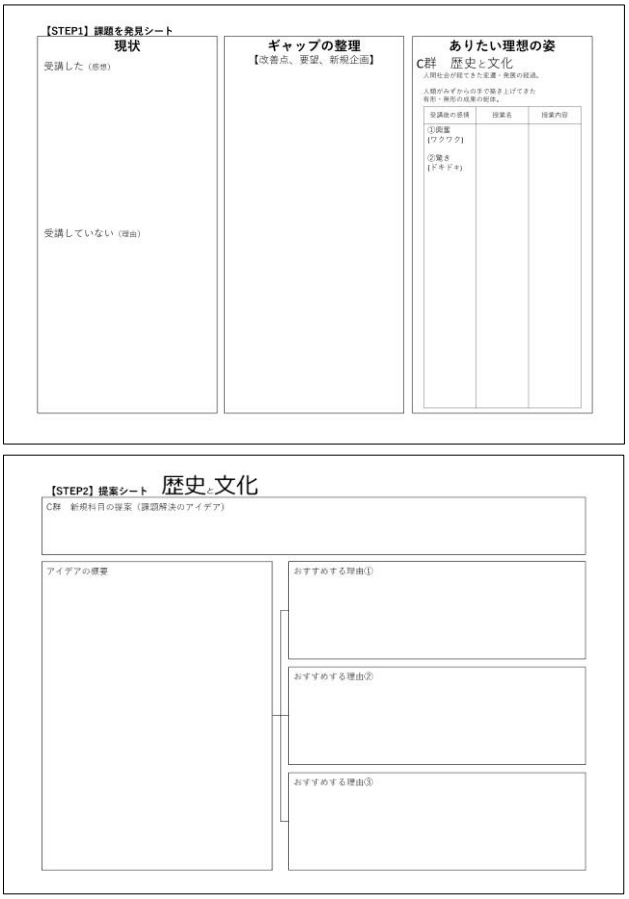

図-3.1　SGD で使用したフレームワーク

4. 各グループからの提案

前述したように、グループ数は 2 グループである。まず各グループから出てきた現状分析の結果を表-4.1 に示す。2 グループから出てきた現状分析の結果は、ほぼ同じような意見であったので、ここではまとめて示す。

まず、C 群を受講した理由として、「歴史が好き」「民俗学に興味があった」「他国の文化や歴史に興味があった」「単位が必要」であることから、学生自身の興味や関心、及び単位取得の必然性から受講していることがわかる。

また逆に C 群を受講していない理由として、「興味がない」「社会系が苦手」という回答から、自身の苦手分野や、興味がない分野であることから受講していないことがわかる。この点から興味を持てる分野の歴史や文化に関する授業を実施することで、C 群の授業への関心が高まることが推測できる。また「時間が合わない」「カリキュラムを見たが興味が持てなかった」「授業名が抽象的で授業内容がわからない」という回答から、カリキュラムの変更や授業名の変更により受講生が興味をもち、また開講時間を変更することによっては、受講が増える可能性があることが推測できる。

表-4.1　C 群の受講に対する現状分析

受講した理由
・歴史が好き
・民族学に興味があった
・他国の文化や歴史に興味があった
・単位が必要
受講していない理由
・興味がない
・時間が合わない
・社会系が苦手
・カリキュラムを見たが興味が持てなかった
・授業名が抽象的で授業内容がわからない

次に、表-4.2 に C 群「歴史と文化」に対する新規の授業科目、その内容、及び授業の実施方法の提案の結果を示す。提案された科目について 1 つ目は、科目名「暮らしと歴史」であり、その授業概要は、「総合大学の特色を活かし、それぞれの学科の分野に特化して日常生活との関わりや、その分野の歴史について講義を行う。」であった。次に 2 つめ目の提案は「学部学科の歴史」であり、その授業内容は、「それぞれの学部学科に特化して成り立ちや経緯などの歴史について講義を行う。例えば、科学史、技術史では、失敗例や成功例を紹介する講

表-4.2　C 群の新規の授業科目の提案

新規科目名	「暮らしと歴史」	「学部学科の歴史」
内容	総合大学の特色を活かし、それぞれの学科の分野に特化して日常生活との関わりや、その分野の歴史について講義を行う。	それぞれの学部学科に特化した歴史について講義を行う。例えば、科学史、技術史、歴史上の問題となって事例に対して、失敗例や成功例を紹介する講義をする。各国の文化や歴史の成り立ちなど、過去と現代がつながるような内容の講義をする。
授業の実施方法	各回、学科がバラバラなグループを作り、ディスカッションを行いドキドキや驚きのある授業を実施する。	各回、学科がバラバラなグループを作り、グループワークで調べ事を行い、発表する。
おススメ理由	・歴史が苦手でも、自分の専門分野なら興味が持てる	・様々な分野の歴史を学ぶことで世界的に活躍できる
	・他学科への興味・関心のきっかけとなる	・自分に合った歴史を学べるから、主体的な学びにつながる
	・グループワークを行うと、他学科との人と関わりが持てる	・歴史の概念が広がる

義をする。各国の文化や歴史の成り立ちなど、過去と現代がつながるような内容の講義をする。」というものであった。

この 2 つの提案された科目「暮らしと歴史」、「学部学科の歴史」と名称は異なるものの授業内容には、共通する部分が多い。すなわち、日本史や世界史などの一般的な歴史が苦手な学生でも、自身の所属する学部や学科の成り立ちや、あゆみ等の歴史について学ぶことは、各専門分野の基礎的な知識や技術を身につけ、応用力や実践力の向上につながるものと推察することができる。また自身の学部学科以外の成り立ち等を歴史や、日常生活に存在するさまざまな日用品や、生活文化に関わる制度、成り立ち、及び移り変わり等と関連づけて知ることは、選択肢の幅を広げ、基礎学力や汎用能力の向上となる知識と力を身につけることにつながるものと推察する。

次に授業の実施方法としては、「各回、学科がバラバラなグループを作り、ディスカッションを行いドキドキや驚きのある授業を実施する。」や「各回、学科がバラバラなグループを作り、グループワークで調べ事を行い、発表する。」などの意見があった。従来の座学中心の一方的な講義方式の学習方法ではなく、受講生である学生たちが能動的に授業に参加して学修する、いわゆるアクティブラーニングによる学修を希望していることがわかる。

5. 参加学生の感想（アンケート結果）

「フクトーーク」終了後、参加者にアンケートを実施した。そのアンケートの結果について以下に示す。

まず、「フクトーーク」に参加するに当たってのきっかけとして、図-5.1 に「どのようにして知ったか？」に関して、「教員からの参加要請があったので知った」の回答が 78%と一番多く、また図-5.2「参加の動機」に関して、「教員（担任・学科教員）から参加要請で、内容に興味を持ったから」の回答が 60%と一番多いことから、教員からの参加要請とともに、興味、関心を持てるテーマだったので参加を決めた学生が多かったと見られる。

次に、「フクトーーク」の実施に対する質問として、図-5.3 に「話し合いは有意義だったか？」に対して、「非常に有意義であった」が 75%、「比較的有意義であった」が 25%であり、2 つの回答を合わせと 100%になることから、参加学生が「有意義であった」と感じていることがわかる。また図-5.4「自

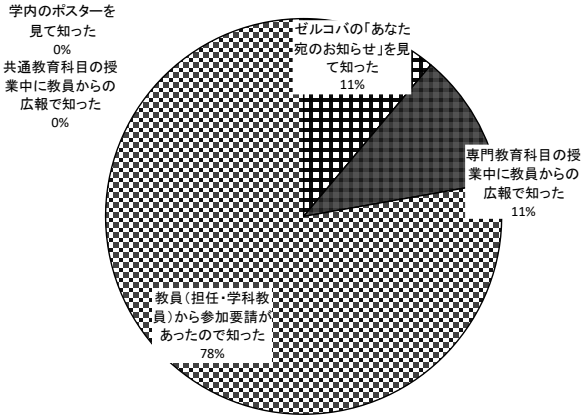

図-5.1 「フクトーーク」をどのようにして知りましたか。（複数回答可）

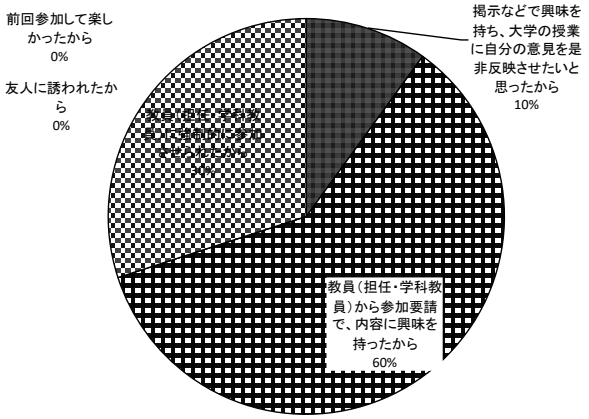

図-5.2 「フクトーーク」への参加の動機を教えてください。（複数回答可）

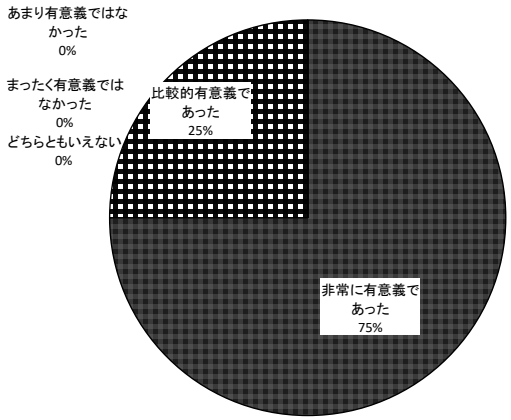

図-5.3 今回の「フクトーーク」の話合いは有意義でしたか。

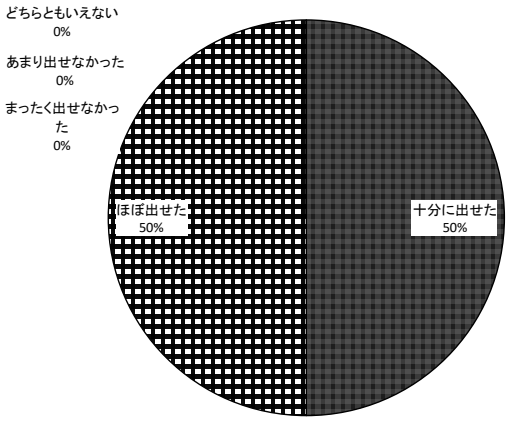

図-5.4 グループディスカッションでは、自分の意見を十分に出せましたか。

分の意見が十分に出せましたか？」に対して、「十分に出せた」が 50%、「ほぼ出せた」が 50%と、これも 2 つの回答を合わせと 100%になることから、参加学生が「意見を出せた」と思っていることがわかる。また図-5.5「ディスカッションの時間」に対しては、87%が「適切であった」と回答、図-5.6「1 グループ当たりの人数」に対しては、75%が「適切であった」と回答していた。よって、グループ構成人数は 4 人の場合、グループ内で個々の学生はその場で意見が出せたと感じてはいるものの、より深い対話をするためには、もう少し時間が長い方が良かったと感じているということがわかる。

次に、今後の授業での実現性に対する問いとして、図-5.7「提案されたプロダクトの実現の是非」では、75%が「実現してほしい」と回答していた。また図-5.8「実現してほしい項目」として、「暮らしと歴史」、「それぞれの学部にあった歴史を学ぶ講義」がそれぞれ 3 名ずつで実施を希望していた。

次に、このような取り組みに対する質問として、図-5.9「学生の意見を取り入れた新規授業の創出の取り組みは、今後も必要と思いますか。」に対して、87%が「学生の知的欲求を満たすためには、必要である」と回答していた。また図-5.10「次回の「フクトーーク」に参加したいか」に対して、「内容によっては参加したい」が 50%と一番多く回答していた。

さらに、表-5.1 は「「フクトーーク」に参加して、思ったこと、考えたこと、改善した方が良いことなど」を自由に記載してもらった結果である。

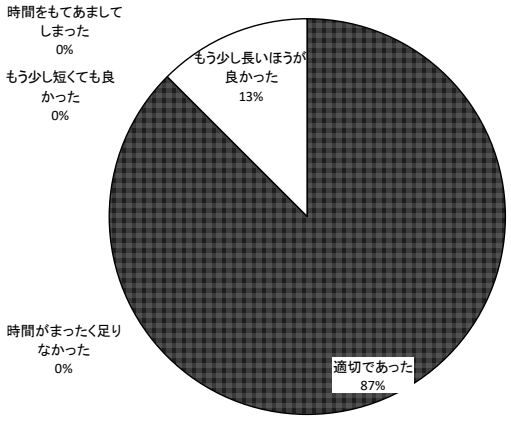

図-5.5　ディスカッションの時間は適切であったと思いますか。

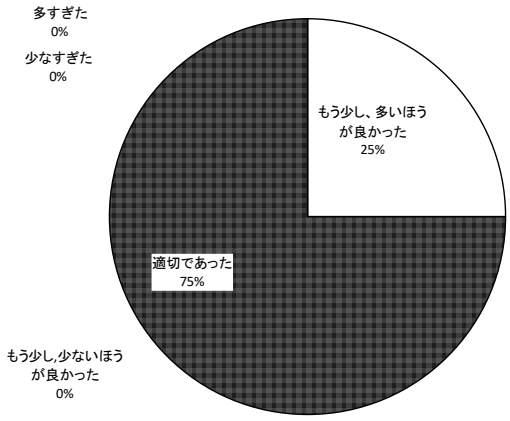

図-5.6　グループディスカッションの1グループの人数は適切でしたか。

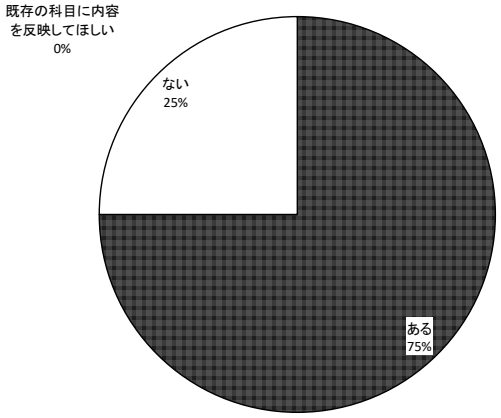

図-5.7　提案された項目の中で是非、実現してほしいものはありますか。

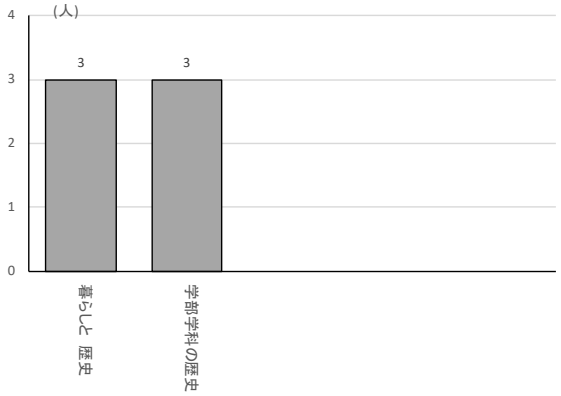

図-5.8　提案した中で実現してほしい項目はなにですか。

「・他学科の学生とグループディスカッションできて有意義な楽しい時間であった。」

「・話し合いの結果、是非、開講して欲しいという科目も出たのでとても有意義だった。」

「・これからも他学部他学科、学年を超えた学生との意見を出し合える機会があれば、積極的に参加したいです。」等グループディスカッションに対する高評価の回答が多く見受けられた。普段の授業では、このようなアクティブラーニング型はあまりなく、彼らは、他者との交流、意見交換、及び課題解決型の授業を実施することで、他者との考え方の違い、自己の発見、及び意見出しに対する共感が得られたのではないかと推察する。

6. おわりに

令和 5 年度の「フクトーーク」では、C 群「歴史と文化」をテーマに、新規科目、学修手法に対して学生の思いや学びたい事柄、学修内容の充実につながるような事柄について、グループ内で意見が交わされ、大学へ提案が行われた。

C 群「歴史と文化」に対して、高校までの学修の方法を変えたり、学修内容をより学生自身の興味や関心事に関連づけされた内容、すなわち各学部学科に関連する事柄を学ぶとなるような取り組みが求められていると言えよう。

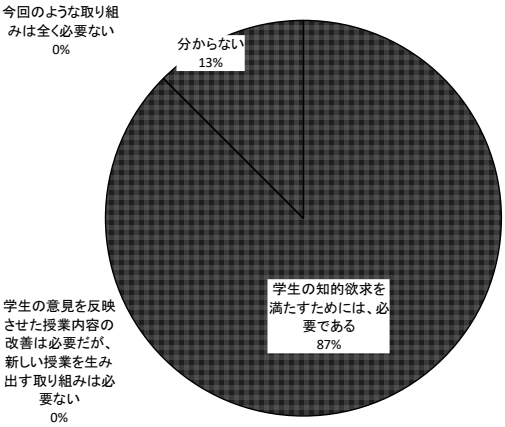

図-5.9　学生の意見を取り入れた新規授業の創出の取り組みは、今後も必要と思いますか。

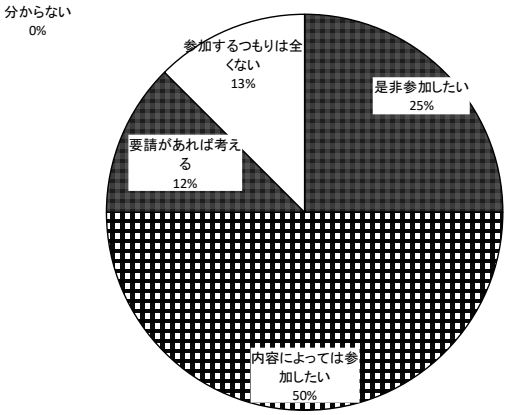

図-5.10　次回の「フクトーーク」に参加したいと思いますか。

表-5.1　「フクトーーク」に対する自由記述の結果

・他学科の学生とグループディスカッションできて有意義な楽しい時間であった。
・話し合いの結果、是非、開講して欲しいという科目も出たのでとても有意義だった。
・今回のグループワークのテーマはC群で、あまり興味が無い分野であったが、グループでの対話を進めるにつれて興味を持つことが出来た。
・これからも他学部他学科、学年を超えた学生との意見を出し合える機会があれば、積極的に参加したいです。
・他の学科の多くの人に参加していただきたい
・自分にとってとても有意義な時間になったと思います。
・意見出すことができて嬉しいかった。
・楽しかったです。

謝辞：本行事の実施にあたり、参加してくれた学生、及び学生参加の告知等でご協力いただきました関係の多数の教職員の方々にここに記してお礼申し上げます。

以下に、当日の実施状況を示す。

発表 1

発表 2

注

(1) 福山大学　大学教育センター　令和 4 年度　共通教育アンケート(1 年次)実施報告書、5 頁、https://www.fukuyama-u.ac.jp/wp-content/uploads/2023/10/令和 4 年度共通教育アンケート（1 年次生対象）実施報告書.pdf